

# 〈資料解説〉「丹下健三書簡綴」(藤本千万太資料)について

—広島市公文書館所蔵資料との関係を中心として—

中 川 利 國 (広島市公文書館長)

はじめに

本資料の寄贈者である藤本千万太氏は、大正 5 (1916) 年生まれ。昭和 12 (1937) 年に旧制広島高等学校を卒業し、終戦後の昭和 21 (1946) 年 1 月に本市職員となる。昭和 24 (1949) 年当時、市長室所属であった藤本氏は寺光忠参議院議事部長による「広島平和記念都市建設法」の草案準備にあたり、国会での趣旨説明の草稿を 1 ヶ月にわたり準備するなど、同法案成立を支えるとともに、後に「広島平和都市建設構想案」の取りまとめに携わった。<sup>(1)</sup>氏は昭和 52 (1977) 年に市民局長を最後に官職を離れ、市原爆被害者協会や市観光協会で事務局長を歴任した後、平成 23 (2011) 年 9 月永眠された。

氏はこうした経歴の中で保存していた広島平和都市建設構想の試案等を含めた貴重な歴史資料を平成 2 (1990) 年 6 月に本館へ寄贈された。その時の寄贈資料の一部である丹下健三書簡綴は、氏が市長室勤務時代に広島平和公園設計コンペ当選者として設計にあたった丹下健三との間に交わされた公用書簡のうち、広島市側に丹下健三から宛てたものであり、寄贈時には丹下健三の生前の公開を禁止することが条件として付されていた。

書簡綴は昭和 24 年 11 月から昭和 26 (1951) 年 6 月までの全 23 通で構成されており、その概要については学会への発表<sup>(2)(3)</sup>ないし報道<sup>(4)</sup>で知られている。特に昨年度は丹下健三生誕百年ということもあり、研究者や学生からの閲覧希望も多く、さらに、全書簡の翻刻発表の申し出もあったが、書簡そのものに平和記念公園建設との関わりが判然としない記述も多く含まれていることから、関連資料を保存している本館自らが全書簡を翻刻することとした。

本稿は、この翻刻書簡綴の理解の一助となるよう、本館所蔵資料との関係を中心に、当時の広島計画に関わる歴史的背景等を中心に解説を試みた。建築学的内容に関しては、今後の関係分野の方々の論考を待ち

たい。

## 神戸博と丹下健三

以下、本紀要掲載の「翻刻 丹下健三書簡綴」を参照しながら、記述を進めることとする。

書簡 3 は発信日が記載されていないが、文末に「来年になりましたら」と書かれた時期が年末を示唆すること、書簡 2 (昭和 24 年 12 月 1 日付) では書簡 1 (昭和 24 年 11 月 27 日付) の宛名として「藤本」を「森本」と間違っただけを詫言っていることから、書簡 2 以降から年末までの昭和 24 年 12 月に書かれたと推定できる。

書簡 3 で言及されている神戸博覧会とは、通称「神戸博」(正式名称「日本貿易産業博覧会」)と呼ばれ、昭和 25 (1950) 年 3 月 15 日から 6 月 25 日までの 102 日間、神戸市の王子会場(王子公園)と湊川会場(湊川公園)の二つの会場で開催された。前年には、横浜市で通称「日貿博」(正式名称は「日本貿易博覧会」)が開催されているが、神戸博の構想は昭和 23 (1948) 年春に他都市で開催された他の博覧会の盛況ぶりから、小寺謙吉神戸市長が着想したものであるとされている。<sup>(5)</sup>

丹下健三と神戸博の関係は、昭和 24 年 1 月に丹下も加わって発足した新制作協会建築部が、地元の同協会会員である小磯良平の斡旋により同博覧会の会場計画を引き受けたのが契機となっている。<sup>(6)</sup>丹下はこの博覧会で、河合正一や丹下研究室の小槻貫一、浅田孝、大谷幸夫らとともに、「第二生産館」の設計や「序曲館」の展示設計を行っている。<sup>(7)</sup>

神戸博は「国内博覧会として始めて『テーマ展開方式』が採用され(中略)日本の経済復興と豊かな国民生活の実現というテーマを『序曲』『資源』『世界』『生産』『通商』『文化』『終曲』の全 7 部に展開して展示構成」<sup>(8)</sup>するものであった。このシナリオを立案したのが、『国際建築』の編集顧問であったとされる小池新二であり、彼は新制作協会建築部とも親しく、日貿博の企画顧問

として「外国館」と「観光館」の企画に携わっていた。ちなみに、この「外国館」の展示設計は丹下が行ったとされている。<sup>(9)</sup>

書簡 3 で「神戸博覧会（中略）で、平和都市、国際文化都市の展示を計画いたしております」とは、実際には神戸博の文化館に「長崎文化都市・広島平和都市室」として両市が被爆の惨禍と復興する姿を展示したことを指す。<sup>(10)</sup> 広島市はこの展示を社会教育課の名で出品し、その内容は原爆の人的被害と建築物被害の写真、被爆資料として石、竹、瓦等 23 個、(市中心部の)原爆被害模型と広島平和公園模型となっている。<sup>(11)</sup>

丹下が書簡 3 で「それについて、神戸博事務局の方からお願いに上ると思いますから、何分とも御高配のをお願い申し上げます」（以下、書簡引用は原文ママとする）と近々の神戸からの勧誘を示唆している。記録によれば博覧会事務局としての出品勧誘は全国を 11 班が分担して行い、11 月 1 日から 9 日までで終わっている<sup>(12)</sup> が、これは主として都道府県庁を対象に産品等の出品勧誘を目的としたものであろう。

写真と実物以外の展示品のうち、原爆被害模型はジオラマ模型であったが、もうひとつの広島平和公園模型は写真 1 および写真 2 に写っているものだと考えている。



写真 1 「広島平和公園計画」の石膏模型

これらの模型写真のプリントのうち 3 枚については、過去に市史編纂資料として収集されたものを近年本館が引き継いだ。これまでも建築雑誌等へかなり頻繁に掲載されていることから、写真自体は広く知られている。これらの写真が印刷物としてはじめて掲載され



写真 2 左から集会所、陳列館、本館

たのは、昭和 25 年 3 月 31 日発行の『市勢要覧 昭和 24 年（1949 年）版』<sup>(13)</sup> であり、次に丹下健三執筆の「平和都市建設の中心課題」を掲載した昭和 25 年 8 月 1 日発行の雑誌『新都市』<sup>(14)</sup> が続き、その後もさまざまな雑誌に掲載されている。『新都市』の記事については、書簡 9 から市の依頼により、丹下が寄稿したことがわかる。

このようによく知られた模型写真であるが、これまでこの模型や写真の制作意図や時期等は必ずしも明確ではなかった。写真に写った模型と書簡 5 で「神戸博の出品のこともございまして、広島平和会館の 1 / 300 の模型を植野模型店に制作させ、目下神戸博の広島の一室に出品いたしております」と記されたものが同一のものであると決定づけたのは、平成 21（2009）年に東京の植野石膏模型製作所において、この模型と丹下健三が写った写真 3 などが 1 2 枚保存されていることが判明したことによる。<sup>(15)</sup>

また、この書簡の事後報告的な書き振りから、模型制作が市の了解を十分に得ずに丹下が独断専行的に行った可能性をうかがうことができる。ほぼ 1 ヶ月後の書簡 10（代筆）では、「模型代金は度々請求に来られ、植野氏に大分迷惑をかけている様ですから、よろしく

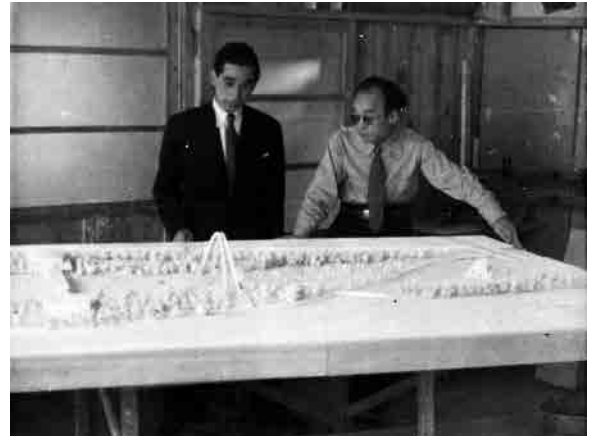


写真 3 模型店で作品を見る丹下健三（左）

御配慮願ひます」と早期の事後処理を催促している。そこまでして、丹下が模型制作にこだわったのは、丹下にとって神戸博への広島出展とは、まさに自身の広島平和公園計画を世に広く知らしめることが、大きな目的であったためであろう。この模型と模型写真の入手は丹下にとって、神戸博という具体的な場所にとらわれず、自身の計画をより具体的に、強烈に訴えることのできる有効な表現手段を得たことになる。それ故、書簡 15 で模型が神戸から丹下研究室へ返送された際に、大きく破損したことを嘆いている。ちなみに、丹

下の師である岸田日出刀東大教授も、4月14日に神戸博を訪れている。<sup>(16)</sup>

さらに、この模型の写真は書簡5に「建築写真の専門家の平山氏にその模型の写真を10数枚撮って貰ってございます。専門家だけあって中々慎重に現像焼付などを行っているらしく、今だに出来ておりませんが、(中略)今度広島に参ります折には、引伸しをして参りましょう」と写真の撮影が平山忠治によってなされたことを示唆している。<sup>(17)</sup>3月30日付のこの書簡では、写真はまだ広島市が入手していないことになるが、3月31日付の『市勢要覧 昭和24年(1949年)版』に掲載されていることは、先に述べたとおりである。これは、『市勢要覧』の実際の発行日はもっと後であったと思われるが、予算が属する24年度内に収めるために、形式的に3月31日としたものと思われる。

#### パンフレットと浜井市長の渡欧米

この書簡綴においては、リーフレットあるいはパンフレットという語句が頻出し、丹下がこの制作に関わっていることがわかる。書簡9で「英文「構想」とリーフレットの印刷—そのための字組、写真、図表等のレイアウト(配置)を美しくするために、相当程度の時間の余裕が必要ですが、とくにリーフレットの内容、容量等について早く御相談いたしたいと思います」と、依頼された制作に関して時間的な余裕のなさを懸念しており、書簡13においても「問題は時日のことです。校正なども小生等が毎日のように工場まで赴いてやっているような次第で、時間をかせいでいます」と逼迫した様子をうかがうことができる。丹下をこれほどまでに忙殺させるパンフレットとは、如何なるものであろうか。

本館が所蔵する藤本千万太資料の中に、『Peace City Hiroshima』写真4と題されたカラー刷りの英文パンフレットがある。全体で6頁のパンフレットは、裏表紙に印

刷所が記されただけで、その制作者や制作目的も不明なものであった。寄贈時のリストには、昭和24年8月と記されているが、この時期は広島平和公園計画のコンペ当選作が発表されたばかりであり、このパンフレットには前述の模型写真も掲載されていることから、制作年月ではなくコンペ当選発表を記したものであろう。

内容としては、冒頭に市長メッセージと街路計画と土地利用計画を主体とした復興計画が掲げられ、続いて現在の中央公園と平和記念公園を合わせた公園整備計画、平和会館・平和公園・平和大通り(100m道路)など各復興事業とその経費、および模型写真で示した平和公園整備計画となっている。冒頭の市長メッセージの最終段落では、広島復興に対する有形、無形の支援への感謝を表しているが、3頁には総額279億円にのぼる復興計画の事業費とその内訳を示しており、これらがパンフレットの制作目的を考える手がかりとなる。<sup>(18)</sup>

表紙には題字とともに、英国詩人エドモンド・ブランデン(Edmund Charles Blunden, 1896-1974)が広島に捧げた詩「ヒロシマ 1949年8月6日によせて」A Song for August 6thの英文と平和記念都市建設法の第1条の英文が載せられており、書簡10で「ブランデンの詩の英文」と「平和都市法第一条の英文」を要

請していることと一致する。また、同パンフレット1頁(巻末写真5)にある建設中と河岸に向けた昭和アパートの写真についても、書簡11および書簡12に図入りで言及されている。最後の5頁と6頁には、前述の平和公園の模型写真が掲載されている。

当初このパンフレットは、神戸博に向けたものかとも考えられた。事実、昭和25年3月9日付中国新聞には「広島島の将来の在り方を示したリーフレットを十萬部製作して入場者に無料配布することに決定した。(中略)英国の詩聖ブランデン氏が寄せた詩を冒頭にのせ平和都市の理念、目標、主体などを中心に

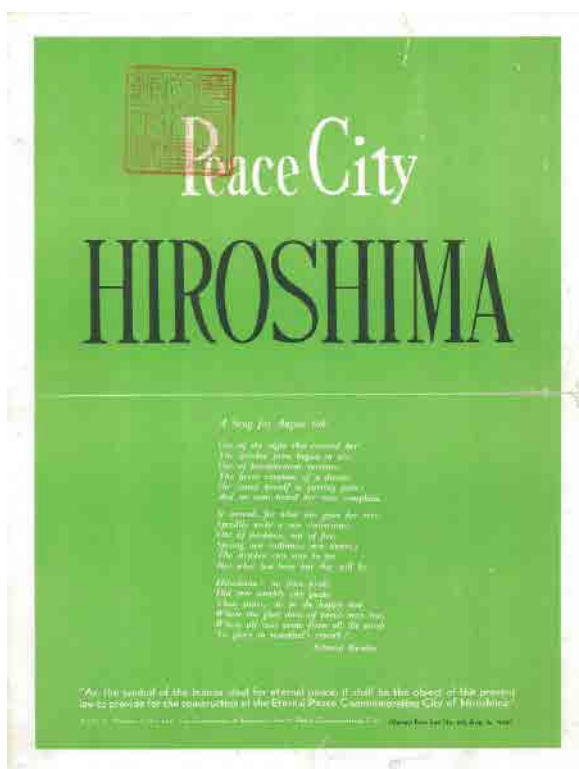


写真4 『Peace City Hiroshima』表紙



綴ったものでヒロシマの過去と現状を一目で紹介する」<sup>(19)</sup>と報道されており、良く似た構成のパンフレットが神戸博向けに作られたようである。また、書簡 3 には「唯今は例の国際版で忙しくしてられる由、御奮闘を期待いたしています」と、神戸博向けのパンフレットの英文版を作った可能性を想起させるような記述もある。

しかしながら、3 月 15 日に開幕した神戸博用と考える場合、(1) 4 月 20 日の書簡 9 ではじめて丹下がパンフレットの制作自体をまかされたと推察できること、(2) 6 月 25 日までの会期の3分の1を残した 5 月 27 日付書簡 13 の時点でパンフレットが未完成であること(復興事業費の表も“May 5, 1950”と記されている)、(3) 丹下が毎日印刷所に通うほど重要なものであり、部数も 1,000 部ぐらいままでに削減しようとしていること、さらに、(4) 多くの県知事、市長等が見学に訪れている神戸博に、浜井市長自身が訪問した形跡がないこと<sup>(20)</sup>から、このパンフレットについては、神戸博以外の用途を検討する必要性を示している。

4 月 20 日付の書簡 9 で「市長渡欧米の御準備で何かと御多忙のことと存じます」、書簡 13 で「市長出発の準備で御多忙のことと存じます」と市長の海外出張に言及しているが、これは浜井信三広島市長と楠瀬常猪広島県知事が、昭和 25 年 6 月中旬から 8 月末までの 2 ヶ月半にわたり、平和運動である MRA (Moral Re-Armament: 道徳再武装) のスイスでの世界大会へ招待されて参加し、その後欧州や米国の各都市で広島の状態と平和を訴えたことを指すものである。書簡で言及され『Peace City Hiroshima』として完成したパンフレットは、この海外出張のために制作されたと考えるのが最も妥当であろう。

特に、前述した書簡の内容との時期的な符合に加えて、書簡 12 で「パンフレットの Sign は広島市長 浜井信三 でよいものか、どうか。あるいは知事とかその他の名を列挙するのか?」と質しており、この海外出張で浜井市長が楠瀬広島県知事や川本市議会議長らと同道したこととも合致する。<sup>(21)</sup> ちなみに、70 名余りに及ぶこの MRA 日本代表団には、杉山宗次郎長崎県知事、大橋博長崎市長も参加している。<sup>(22)</sup>

昭和 25 年の浜井市長の外遊は、平和記念都市を掲げて中心施設である平和記念公園の整備に取り組んでいるさなか、広島市が国際舞台で被爆都市として平和を訴えた初の出来事であり、歴史的にも貴重な第一歩であった。また、浜井市長らの渡米は、米国において

も大きく報道される<sup>(23)</sup>とともに、8 月 6 日に行われたロサンゼルス滞在中の MRA 会合での演説が、ラジオで全米に放送されたと伝えられている。<sup>(24)</sup> さらに、米国西海岸や帰路に立ち寄ったハワイでは、現地の日系人に対して広島から映画を持ち込んで復興支援を訴えている。<sup>(25)</sup>

この浜井市長の外遊に関する資料は、管見の限りでは、この『Peace City Hiroshima』が現時点では唯一のものとなるが、この資料の歴史的な意味は、浜井市長に関わるだけでなく、その後の丹下健三の活躍にも繋がっている。

## 世界の舞台へ

7 月 8 日付の書簡 14 で丹下は、復刊された『国際建築』からの依頼で広島計画を掲載したいと述べている。また、この雑誌の抜き刷りを入手できれば「この前の英文パンフレットの日本語版ができる」としていることから、この英文パンフレットが日本語版の翻訳ではないオリジナルであることを示すとともに、『国際建築』へ掲載記事は、かなりの部分このパンフレット『Peace City Hiroshima』を基にしていることを示している。<sup>(26)</sup>

当時、7 月に復刊したばかりの『国際建築』の編集員だった田辺員人は「丹下研究室に取材に行ったら、浅田さんに捕まって『広島平和記念公園のコンペ案』の資料と模型写真をいただいたのです」<sup>(27)</sup>と証言し、続いて「それを『国際建築』の 1951 年 9 月号(1950 年 10 月号の誤り：筆者註)に掲載したのですが、『国際建築』は海外にも発送していて、丹下研の『広島平和記念公園のコンペ案』がアメリカで話題になりました」<sup>(28)</sup>と述べており、『国際建築』への掲載が必ずしも周到に準備されたものではなく、あらかじめ手元にあった『Peace City Hiroshima』や、それまでに制作したものを提供したことをうかがわせる。

実際に『Peace City Hiroshima』(以下 P と略)と『国際建築』(以下 K と略)の記事を本稿文末に両資料の写真 5 及び写真 6 を掲げて比較してみると、K の冒頭 4 頁にわたる復興計画において、K27 頁「広島計画」は P1 頁の市長メッセージを数段落割愛し、同頁下段の復興計画図も P5 頁の土地利用区分を簡略したものである。続いて、K28 - 29 頁「平和都市の中心課題」は P2 頁下段の説明文と P3 頁の主要事業の説明および図を組み合わせたものである。K30 頁は P2 の図に詳

しい凡例を加えたものとなっている。

次に設計コンペの当選案について、K31 頁から「広島平和会館計画」と題して説明している。冒頭の K31 頁は、P5 頁中段の模型写真の上に P3 頁最上部の「Peace Hall Project」の文に若干手を加えて載せている。一方、K32 - 33 頁は広島平和会館計画として、より詳しい建物の一二階平面図の上部に P5 頁下段の写真を配置している。

見開きで「平和会館配置模型」と題された頁のうち K34 頁は P6 頁と全く同じものであるが、右頁の K35 にはドーム側からの模型写真の上部に和文の各施設の説明が加えられている。

書簡 13 の「2. 児童センターの基本計画について」で言及されている図面は、K36-37 頁の「児童センター」に一部が掲載されており、基になった「HIROSHIMA CHILDREN'S CENTER SITE PLAN」および「BIRD'S EYE VIEW」という図面は、5 月 25 日の作成日付で本市に収められている。最後に K38 - 39 頁の「児童センター 芸術と科学博物館・図書館」に関しては、右図の図書館の図面のみが「HIROSHIMA CHILDREN'S CENTER LIBRARY」と題して、前述の図面とともに本市に残されている。

しかし、この『国際建築』への寄稿は意外な展開をもたらした。それは、当時の建築界の国際的な会議である第 8 回 CIAM (近代建築国際会議) の事務局長ホセ・ルイ・セルトが、ル・コルビジェ事務所時代の仲間である前川國夫を通じて丹下の参加要請を行ったのである。<sup>(29)</sup> 昭和 26 年の 7 月 7 日から 14 日までロンドン近郊のホデスドンで開かれた CIAM において、国際デビューを果たした丹下は、「広島平和都市建設構想案とピースセンターの模型写真からなる 7 枚のパネルを前に発表した」<sup>(30)(31)</sup> のであった。

丹下の突然の外遊に関しては多額の費用の工面が問題となったが、書簡 22 から広島市も（おそらく発表用資料の）制作費の助成という形で援助しており、さらに、学術会議の補助を加えても不足する懸念もあることから、丹下自身が広島市からの設計料の前借りの可能性にも言及している。広島市としても、前年には浜井市長が外遊を果たしたこともあり、平和都市建設構想を世界へ PR する絶好の機会が得られると考えたことであろう。

6 月 30 日から 9 月 12 日までの外遊においては、CIAM への参加ばかりでなく、欧米の建築を実際に見

聞き、また各地での建築家との交流により、「丹下は、自分の建築的資質を自覚し、また 20 世紀後半のモダニズムの行末について新しい予感を得た」<sup>(32)</sup> と、その後世界に建築家として成長する丹下に大きな影響を与えたのである。

#### むすびにかえて

丹下健三が昭和 24 年 8 月に広島平和公園設計コンペに当選してから、昭和 26 年 7 月の第 8 回 CIAM 参加までについて、本書簡綴とその他の本館所蔵資料を関係付けて解説を試みた。丹下健三とその手による広島計画が、神戸博や浜井市長の外遊など当時の広島復興期の歴史的な出来事とも関わりながら、世界的な建築計画として知られていった経緯の一端に触れることができたと考えている。

なお本稿のうち、神戸博と丹下に関する記述は、中国新聞社西本記者の教示に負うところであり、本稿執筆の端緒となったことに感謝するものである。







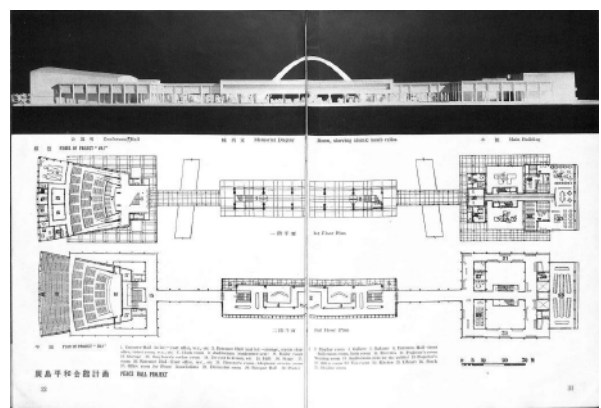
27頁



28-29頁



30-31頁



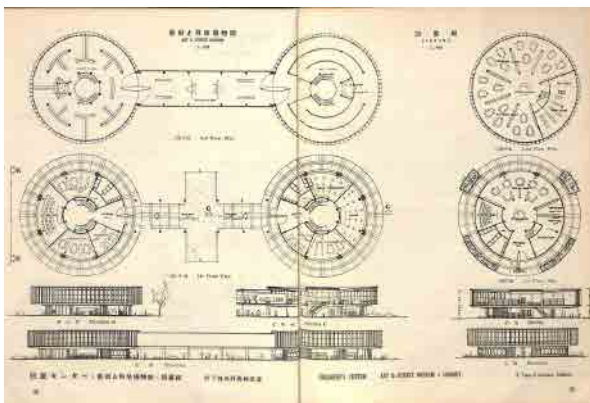
32-33頁



34-35頁



36-37頁



38-39頁

註

- (1) 広島市公文書館、『広島平和記念都市建設法の制定の当時を振り返って 一関係者による座談会一』、昭和 62 (1987) 年 8 月 6 日
- (2) 石丸紀興、「広島平和記念公園コンペ後に広島市担当者に送付された丹下健三書簡に関する研究」、『日本建築学会中国支部研究報告集』第 34 巻、平成 23 (2011) 年 3 月
- (3) 石丸紀興、「広島平和記念公園コンペ後に広島市担当者に送付された丹下健三書簡に関する研究 その 2 計画対象区域 (計画範囲) に関して」、『日本建築学会大会学術講演梗概集』(関東)、平成 23 (2011) 年 8 月
- (4) 『中国新聞』平成 21 (2009) 年 1 月 9 日「平和公園設計 23 通の情熱 故丹下健三氏の直筆書簡」
- (5) 日本貿易産業博覧会事務局編、『神戸博会誌』p4、昭和 25 (1950) 年、神戸大学蔵 梅宮弘光教授提供
- (6) 船曳悦子、梅宮弘光「日本貿易産業博覧会 (神戸博、1950 年) における新制作協会建築部の会場設計」p92、『人間科学研究』第 10 巻 1 号平成 14(2002) 年、神戸大学発達科学部人間科学研究センター
- (7) Ibid p107
- (8) Ibid p96
- (9) Ibid
- (10) 前掲 (5) p176
- (11) 日本貿易産業博覧会事務局編、『出品目録 第五部 文化』出品目録第六分冊、昭和 25 (1950) 年、神戸大学蔵 梅宮弘光教授提供
- (12) 前掲 (5) pp84-85
- (13) 広島市役所、『市勢要覧 昭和 24 年 (1949 年) 版』、昭和 25 (1950) 年 3 月 31 日
- (14) 丹下健三 「平和都市問題の中心課題としての平和会館」、『新都市』第 4 巻第 8 号、昭和 25 (1950) 年 8 月 1 日
- (15) 『中国新聞』平成 21 (2009) 年 7 月 16 日「平和公園 入魂の設計 故丹下氏が模型精査 60 年前の写真 10 点見つかる」
- (16) 前掲 (5) p202
- (17) 『中国新聞』平成 25 (2013) 年 4 月 29 日「平和公園模型 50 年神戸博で初公開 故丹下氏の書簡に記述 市公文書館調査で判明」
- (18) 『Peace City Hiroshima』の最終段落 ”The people of Hiroshima wish to take this opportunity to express their sincerest appreciation for every act of kindness extended them by friends in every part of the world through offers of moral encouragement, constructive advice, financial or material assistance. Every little helpful hint or criticism regarding Hiroshima’s Peace City planning as described in the ensuing pages will be welcomed and appreciated.”

- (19) 『中国新聞』昭和 25 (1950) 年 3 月 9 日「大パノラマなど 広島を紹介 “神戸貿易博” へ」
- (20) 前掲 (5)pp200-209 に神戸博を訪れた要人が記録されており、同様の展示を行った長崎市長の訪問も記されているが、広島市長は記録されていない。
- (21) 浜井信三『原爆市長 - ヒロシマとともに二十年』p211、朝日新聞社、昭和 42 (1967) 年 12 月 15 日
- (22) “VISITING JAPANESE PASSIVE ON KOREA”  
*The New York Times*, July 24, 1950
- (23) Ibid
- (24) 『中国新聞』平成 24 (2012) 年 1 月 29 日「検証 ヒロシマ 1945～95 平和式典」
- (25) 『中国新聞』平成 25 (2013) 年 9 月 30 日「時代の波 埋もれた映像 復興資金求め製作 国内上映されず」
- (26) 丹下健三計画研究室「広島計画・平和都市の建設」『国際建築』第 17 巻第 4 号、国際建築協会編、昭和 25 (1950) 年 10 月、広島市立中央図書館蔵
- (27) 豊川斎赫編『丹下健三と KENZO TANGE』p93、平成 25 (2013) 年 7 月 20 日、オーム社
- (28) Ibid
- (29) 丹下健三、藤森照信『丹下健三』p147、平成 14 (2002) 年 9 月 10 日、新建築社
- (30) Ibid
- (31) 「広島平和都市計画」『新建築』第 29 巻第 1 号 1 頁 -17 頁 1954 年 1 月に掲載された第 8 回 CIAM で発表されたパネルも基本的には、『Peace City Hiroshima』で制作されたものを中心になっている。ちなみに、この『新建築』はその後の広島計画の進展に合わせて本館や陳列館等のプランがより具体的に示されているが、3 頁の広島市長メッセージは『Peace City Hiroshima』1 頁掲載の市長メッセージの最終段落を割愛したものとなっている。
- (32) 前掲 (29)



写真 7 『Peace City Hiroshima』裏表紙